

■ 編集だより

編集後記

平成 21 年 8 月 30 日第 45 回衆議院議員総選挙で、結党以来自由民主党が第一党を転落し、民主党政権へ交代するという戦後歴史上の大変革が起こった。個人的には民主党が勝利すると思っていたが、民主党が 308 議席とに対して自由民主党の 119 議席という、これほどまでの大差がつくとは予想外だった。政権選択選挙とはいわれていたが、民主党のメンバーの多くは元自由民主党に在籍していたように、民衆には必ずしも理念で分かれていない政党に対してわかりにくいからだ。しかし、小選挙区（比例代表並立）制という選挙制度と、日本人のとりあえず流れに乗るとい国民性（？）から鑑みれば、4 年前の第 44 回衆議院議員総選挙（いわゆる郵政選挙）も同様に決して不思議ではないのかもしれない。

中選挙区制度であった時代には、比較的理念で集まっていた自由民主党の派閥の長が小政党の党首のようなもので、ある派閥が政策的に失敗すれば、他の派閥が入れ替わって政権運営していた。しかしながら歴史的法則というか、同じ派閥が何代にも渡って政権運営しすぎると、どうしても国益よりも組織防衛のため動いてしまい、時代の流れに組織体制が適応できなくなるという弊害が起きてくる。ましてや、今の派閥は理念の元で集まっているわけでもなく、また派閥の長も本当の実力者になるわけでもなく、ただ群れているとしか見えず、全く意味不明である。そのため選挙制度の変更も重なり、他党も巻き込んだ政権交代という結果になるのは必然の結果かもしれない。当然多くの論評が語るように、今までの公共事業などの古い手法を打開するために出現した小泉政治が掲げる新自由主義的要素が、今まで地方を大切にしてきた社会民主的要素までぶっ壊し、それを最後まで調整することができなかった自由民主党の自滅という理由もあろう。自由なところは自由にすべきだが、それではどうしようもない所こそが政治を真に必要としている分野ではなからうか。自由民主党以上に疲弊しているのが官僚体制で、民主党には今後、ビジョンを示す政治家と事務方である官僚との本来やるべき役割分担を明確化し、国益に向かって頑張ってもらいたい。

とはいえ政権交代となれば様々な政策変更があり、ミーハーな私は、自民党政権が終わるだろうと予測しつつも ETC を購入してしまい、今後高速道路が無料化になればどうなるのであろうと悩んでいる。それは冗談にしる、我々にとって、医療従事者として医療勤務体制は良くなるのか、研究者としては今まではバブル気味だった（？）研究費はどうなるのか、教育者としてはこれ以上の学力低下は防げるのかななどの重要な問題がある。さらには、後期高齢者健康保険制度や障害者自立支援法の廃止などもある。今後は大量生産大量消費のものの時代からいかに質を向上させるかというところの時代への変換が大切であろう。そういう意味で民主党の政策を吟味し対応していきたい。ただ、医療福祉を含めた社会保障は政治が介入しなければいけない分野だけに、できるだけ与野党一緒になって、あくまでも国民のために、例え今後政権が交代しようとも一貫したより良い制度の構築を望みたい。

伊藤千裕